

## W杯から政治の混迷へ

盛田 常夫

### W杯に取り残されたハンガリー

日本と韓国の活躍で、2002年W杯を堪能させてもらった。1回切りで終わってしまう決勝トーナメントより、4チームによる予選リーグの方が、対抗ゲームとしては余ほど面白いことも分かった。残念なことに、今回のW杯にはスロベニア、ポーランド、クロアチアを除き、中・東欧の常連が参加できなかった。とりわけ、1986年以来久しく出番のないハンガリーは、国民も自嘲気味にハンガリーの水準低下を嘆くばかりで、出口が見当たらない。

1998年にFIDESZ政権はスポーツ省を創設した。ドイツ大臣の最初の仕事がハンガリー・サッカー協会幹部の一新だった。FIFAやIOCを見ても分かるように、スポーツの世界には巨額の利権がついて回る。日本人会が運動会やソフトボール大会で使用しているFTCクラブの不動産は、時価にすれば巨額のものだ。不動産自体は国や自治体の所有だが、クラブがその占有権と使用权をもっている。そこから、クラブ幹部の各種の腐敗が生じる。

ドイツ大臣が協会理事長の更迭を決めた途端、理事長はFIFAに訴えた。こういう場合のFIFAの対応は早い。政治がサッカー協会に介入するような国のチームは、FIFA主催の国際大会への参加を認めないときた。まったく同じことがポーランドでも起きた。FIFAはサッカー人気と利権を盾に、両国での理事長更迭を撤回させた。止む無く、ハンガリーでも協会理事の選挙を通して、交代の手順がとられた。かくようにFIFAの権力は強い。

自らもアマチュアチームを率いるオルバンは、ハンガリー・サッカー再生のために手を尽くそうとしたが、出足でつまずいた。連立与党だった小地主党のトルジャン党首が伝統あるFTCの理事長に就任して、農業省の資金をつぎ込んだが、資金の多くは小地主党とFTCの幹部のポケットに入ってしまった。ハンガリーのサッカー再生のためには、協会幹部の刷新だけでは足りないだろう。選手の意識そのものを変えるような指導者が必要だろう。

### メジエシ首相の過去が暴露

6月18日の日刊紙Magyar Nemzet紙は、メジエシ首相が内務省の諜報部員だったことを示す内務省文書を公表した。この文書は「D-209」(メジエシの暗号名)が大蔵省課長に昇進し、諜報部員としての昇進を命ずる文書(1978年3月付)である。大蔵省の給与とは別に、内務省より給与4500フォリント(当時の平均給与で、当時の為替レートでほぼ170ドル)、諜報部員手当て600フォリント(23ドル)、フランス語手当300フォリント(11ドル)の支払が明記されている。この文書からもう一つ読める情報は、高校卒業の後にすぐ経済大学へ入学できず、1年間、別の仕事をしていた時(1961年)に内務省の諜報部員になり、大学卒業後、大蔵省へ入省した後も内務省諜報部員を兼任していたことである。

メジエシの諜報部員としての経歴は、社会党内部では周知の事実だったといわれる。

ホルン政権の閣僚（大蔵大臣）として内務省の自分のレコードを閲覧している。それはメジェッシだけでなく、旧体制で重職にあったかなりの政治家について言えることだ。しかし、本人も社会党も、東独のように隣人や同僚の行動をスパイするという陰湿な役割を担ったわけではないので、万が一、問題になったとしても切り抜けられると考えたのだろう。旧体制のエリートは共産党（社会主義労働者党）に入ってそれなりのポストを得るか、あるいは内務省との契約で職場の情報提供者になるか、どちらかの道を選択する以外に昇進の道がなかった。メジェッシはこの後者を選んだと思われる。今のところ、同僚を監視したレポートを作成していたかどうか、その情報は公開されていない。

メジェッシは情報部員であることを認め、それは1961年からではなく1977年からのことで、主として対ソ連の情報防御の仕事を担当したと主張している。対ソ対IMFなどの対外的な関係において、ハンガリーの国家機密を守るためにその役割を担ったのであり、国益に適う行動で、何ら恥ずべきことではないと主張している。この部分はそうだろう。IMFのような国際機関にたいして、ハンガリーは経済統計の粉飾操作をおこない、加工されたデータを公表していたし、ソ連共産党はハンガリーのIMF加盟を容認していなかった。しかし、それ以前の役割について、メジェッシは何も語っていない。それほど有能とも思われないメジェッシが、旧体制で昇進の道を行ってきたことを考えると、諜報部員としての長年にわたる履歴が考慮されたと思われる。

メジェッシは「何ら恥じる行動はしていないが、連立相手の信認が失われるのであれば、首相のポストを去る」とし、SZDSZも首相交代をいったん決めたが、社会党との妥協が成立し、内務省文書の公開およびメジェッシの国会での弁明を条件に信認を決めた。秋のブダペスト市長選挙でのデムスキー支持が暗黙の了解事項になっていうだろう。ただ、内務省文書の全容が公開されれば政治混乱も予想される。今後の展開が注目される。

諜報・情報部員としての役割は、旧体制で知的エリートが昇進する際の条件だった。旧体制のエリートが、体制転換を10年も経て再び新体制の政権のトップに就くという矛盾がこのような形で噴出している。もちろん、Magyar Nemzet紙が暴露したものだが、明らかにFIDESZの政治闘争の一環で、ハンガリーの体制転換はいまだ継続中である。

## チェコも世代交代か

6月16日のチェコの下院総選挙で、ODS（市民民主連合）、つまりクラウス党が敗北した。1990年からのチェコの政治は、旧共産党時代に反体制知識人として知られたハヴェル（大統領）、クラウス（初代チェコ首相、ODS党首）、ゼマン（二代目首相、社会民主党前党首）の三人の役割分担をめぐって政治が動いてきた。文人のハヴェル、強烈な個性とカリスマ性で指導力を発揮してきたクラウス、旧体制ではクラウスの同僚だが仲間割れで社民党を率いたゼマン。クラウスは首相を辞任した後はゼマンの後を次いで国会議長になったが、ハヴェルの後釜として大統領を狙っていることは周知の事実。これにたいして、ハヴェルは経済主義一本槍の傲慢クラウスを極度に嫌い、死んでも大統領のポストをクラウ

スに渡さないというほど犬猿の仲だ。ゼマンは前回の選挙で第一党になり首相の地位を手に入れたが、過半数に達せず、クラウスとの談合的な与党連立でこの4年を乗り切ってきた。今回の選挙では談合政治が批判され、クラウス党は沈んだ。社民党はゼマンに代わる若い新党首シュピドラを選び、クラウス党に対抗し、それが功を奏した。

ハンガリーが旧体制のエリート支配の矛盾で政治が混乱の様相を見せているのにたいし、チェコでは旧体制の反体制知識人の役割分担をめぐる政争が続いている。やがて、これらの政治家が引退する時に、ようやくこの両国もまた、体制転換の過渡期を終えて、旧体制のしこりを克服した政治体制を確立していくのだろう。

2002年6月